

[資料]

終戦前滞日ドイツ人の体験 (2)

——「終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査」——

荒 井 訓

前号に続き標記調査により得られた証言を採録する。今号には当時の外交官4人の証言を集めた。4人とも1947年8月に横浜を出航した米軍の輸送船「ジェネラル・ブラック」に乗せられドイツに送還された。その年の2月には同じく米軍の輸送船「マリン・ジャンパー」が1,100人余りの在日ドイツ人を乗せて横須賀を出航し、途中上海でさらに100名ほどのドイツ人を乗せ、ブレーマーハーフェンに着いている。こうして3,000人内外いたと推定される在日ドイツ人の大部分が日本を去ることになった。日本に残ることを許されたのは1933年以前から日本にいたドイツ人やユダヤ系ドイツ人など700～800人だった。

ガリンスキー氏は1937年から1947年まで大阪・神戸ドイツ総領事館および在日ドイツ大使館に、クラブフ、プロイアー両氏は1940年から1947年まで大使館に勤務した。それ以前に、クラブフ氏は1935年～1937年、プロイアー氏は1937年～1938年に日独両国間の最初の公的交換留学生として日本に滞在している。彼らはいずれも戦後再び東京の大使館あるいは大阪・神戸総領事館に勤務しており、退官後も日本に留まったガリンスキー氏をはじめ戦前・戦中・戦後をとおして日本の現実を見続けた人々である。

1941年から1943年まで東京のドイツ大使館に勤務し、1943年の夏に上海のド

イツ大使館に移ったコルト夫人は戦争に翻弄され、いわば日本に漂着した女性である。1940年5月、ヒトラーがオランダを攻撃すると、オランダ領インド（蘭印）すなわち現在のインドネシアにいたドイツ人は収容所に入れられた。シンガポールのドイツ総領事館に勤務していたコルト夫人も例外ではなかった。1941年7月に彼女を含む500名前後の婦女子は（おそらくスイス領事と国際赤十字の協力により）解放され日本に送られた。1942年に日本軍が蘭印を攻略するとさらに100名を超える婦女子が日本に送られた。「蘭印婦人」と呼ばれた彼女たちはドイツへ帰る経路を断たれ終戦を日本で迎えることになったのである。コルト夫人は上海で「ジェネラル・ブラック」に乗り込んだ。

1. ヴォルフガング・ガリンスキー氏の体験

Wolfgang Galinsky : 1910年1月5日ナムスラウ（シュレーゲン）生まれ。1937年8月から1939年5月までアタッシュェとして大阪・神戸総領事館に勤務、1943年11月から1944年夏まで東京のドイツ大使館に公使館書記官として勤務。1944年夏から1947年夏まで疎開先の山梨県勝山村に滞在。1947年8月、「ジェネラル・ブラック」にて上海経由で本国送還。その後、1951年7月から8月まで経済派遣団団員として東京に滞在。1952年3月から1958年12月まで東京で1等公使館参事官（1956年から1等大使館参事官）として勤務。1963年6月から1973年9月まで神戸で大阪・神戸総領事として勤務。1973年9月以降退職官吏として神戸に住む。1973年9月から1987年3月まで京都外国語大学教授。1973年10月から1997年3月まで大阪の関西大学ドイツ語講師。1987年2月より神戸ドイツ学園教師。1998年8月15日没。

私は今85歳で半世紀以上日本で暮らしています。1937年に初めて日本に来て、1947年まで滞在しました。1952年にあらためて日本に来て1958年末に去り、1963年に再び来日して、それ以来日本に住んでいます。

私は外務省で働いていたために若きアタッシュェとして日本に来ることになりました。私はまず1937年から1939年まで大阪・神戸のドイツ総領事館で働きま

した。大阪・神戸という呼び方について言うと、重要な港都である神戸に1874年ドイツ領事館が開かれました。第1次世界大戦後それが総領事館に格上げされました。神戸から約40キロ離れた大阪は300万人の人口をもつ重要な商業都市に発展し、ここに1932年から1934年まで独立した領事館が設置されました。神戸と大阪の領事館はその後「大阪・神戸総領事館」として統合されました。この複合的な役所は、総領事館が両都市に事務所を構えるというかたちで機能していました。大阪には経済班がありました。ほかの任務をもっていた総領事館の職員たちは決められたスケジュールにしたがって週2日大阪で、週4日神戸で働きました。当時総領事館は週6日勤務でした。

1939年5月に私は当時独立した国家だった満州の新京に転勤しました。そこに1943年11月までいました。半年間私はハルビンのドイツ領事館でおなじくアタッシュとして過ごしました。それから新京にもどされ公使館書記に昇進しました。この職階で最終的に東京の大使館に送られ、そこでドイツの終戦まで外交官として働きました。

戦後1951年にドイツの経済派遣団とともにあらためて日本に旅行しました。1952年から1958年まで私は東京の大使館の大使館参事官を務め、1963年から10年あまり大坂・神戸ドイツ総領事を務め、ここで退官しました。私はなお11年以上京都外国語大学の教授として教壇に立ち、定年に達して退職しました。私は今でも教職に喜びを感じるので、神戸ドイツ学園で地理と歴史を教え、大坂吹田の関西大学では週1回ドイツ語講師として働いています。

私は日本の戦争を1943年11月から1944年夏まで東京で体験しました。その夏、東京の大使館は空襲のために疎開しました。大使館は山梨県河口湖畔の富士・ビュー・ホテルを借り、職員の一部はそこへ疎開しました。大使館の別の部局はほかのいくつかの場所に移りました。大使は側近とともに箱根の有名な保養地、宮ノ下に行き、通信班は当然ながら東京に残らなければなりませんでした

が、東京郊外の成城に移りました。他の部局は河口湖畔の富士・ビュー・ホテルに引越し、かつてホテルの食堂だったホールに、そこに住んで仕事をする大使館員たちの大部屋事務所をつくりました。大使館員の家族はホテルがもっていた大家族用のバンガローやホテルの客室に住みました。湖畔の村に家を借りて移り住んだ者もいました。たとえば私は、ある医者の子の家族の別荘を借り、そこに小さな庭をつくり、2羽の鶏と1羽のウサギを飼っていました。2羽の鶏の片方は、キジになりたいという欲求をもっていたのかもしれませんが。毎晩、家の脇にあった高い木の上に飛んでいって、朝には、うまく下へ飛び降りられずにわめいていました。この鶏は何年も私を失望させました。卵をひとつも生まなかつたのです。真冬のある日突然、舗装された道の上に卵をひとつ生みましたが、それもこわれてしまいました。しかし、非常に寒かったためすぐに凍り、最高に歓迎すべき食べ物をスプーンでいくらか救うことができました。

河口湖畔に私たちは1945年5月のドイツの終戦以降もとどまり、1945年9月にアメリカ占領軍が来るまでいました。米軍が日本にやって来たとき、彼らは大使館が仕事をしてきたホテルを将校のための「レスト・アンド・レクリエーション・センター」として引き継ぎました。ホテルの上階に住んでいたドイツ人はほとんど近辺にとどまり、農家や別荘や旅館を借りて移り住みました。あそこの日本人は当時は観光客を期待していなかったのですが、自分のところの部屋や小さな家を貸すことができ喜んでいました。

日本にいたドイツ人は当時いくつかの大きなグループに分かれていました。家族と一緒にいたビジネスマンたちは、現在日本にいるビジネスマンと同じような暮らしをしていました。宣教師や修道女たちもいましたが、彼らも現在の同僚たちと同じ暮らしをしていました。ほかに、1942年から45年の日本には、現在のインドネシアであるオランダ領インドに住んでいて、オランダとドイツの間

で戦争が始まったあとオランダによって収容されていたドイツ人の女性と子どもたちの大きなグループがいました。男たちはイギリス領インドのデーラ・ドゥンにあった収容所に送られ、女性と子どもたちはオランダ領インド内のいくつかの収容所に入れられたのです。そして日本が1942年にインドネシアを占領したとき、日本軍はこれらの女性と子どもたちを日本へ運び¹、彼らは東京・横浜と大坂・神戸の両地域に分かれて大きなグループをつくっていました。そして、小さなグループが河口湖畔の村々にも住みつきました。

これらの女性や子どもたち全員にドイツ大使館領事部あるいは総領事館は終戦まで、つまり活動を停止するまで援助金を給付していました。外国にいて援助が必要になったドイツ人は現在もドイツの在外公館から援助を受けますが、それと同じことです。その後大使館が活動を停止したとき、河口湖畔にいた私たちはこれらの女性や子どもたちのために尽力しました。小さな学校のための机や長椅子をそこで作り、靴がすぐに小さくなってしまう子供たちのために（石の多い地面を歩くために比較的早く修理が必要になるということもありました）靴工房をつくって靴の修理をし、小さなドイツ人社会のためにパンも焼きました。

河口湖での食糧調達についてお話すると、ドイツ人はまず日本人と同じ配給を受けました。日本の白パンがあり、そのほか、私たちは自分たちのベーカリーでドイツの黒パンを焼いていました。それから、もちろん土地でできる野菜もありました。たとえば、トウモロコシやジャガイモです。あの辺りは北海道へ送る種ジャガの産地だったからです。

1 ガリンスキー氏は1942年に来た「蘭印婦人」についてのみ言及しているが、冒頭で述べたように、最初の「蘭印婦人」はすでに1941年来日している。たとえば、1941年7月5, 11, 16日付朝日新聞参照（上田浩二教授の調べによる）。

さらに、日本にいたドイツ人は一種の追加補給も受けました。太平洋で行動していたドイツの仮装巡洋艦がオーストラリアの食糧輸送船を拿捕したのです。この船はラードやフェットの入った樽やコンビーフやレバーペーストのような保存食品を入れた数え切れないほどの箱を積んでいました。これらの奪い取った食糧をドイツ海軍が日本在住のドイツ人に用立てたのです。それで私たちの食事は改善されました。それに、たとえば土地の肉屋にはいつも、食肉用家畜のレバーや心臓や肺臓のような、日本人は好んで食べないけれどもドイツ人にとっては補助食として歓迎されるものがありました。

河口湖畔にいた私たちの小さなドイツ人社会にとっては、車を手に入れることも必要でした。たとえば砂糖など、手や自転車で運ぶのには適していないものが近くの小さな町で引き渡されていたので、私たちは日本式の2輪の荷車（リヤカー）と、私たちがユールヒェンと呼んでいた雌牛を買いました。一度、牛の後ろをゆっくりと歩いて6キロも谷を下り、また6キロ上ってみれば、生活のすべてに時間がかかるということが分かります。ユールヒェンは、私たちが1947年の夏に本国送還されることになったとき、私たちにある種の財政的問題をもたらしました。というのは、私たちはこの雌牛を連れていくことができなかったからです。他方、この牛はいわばドイツ人社会の財産でもあり、そのため本当は米軍による没収の対象でした。私はこの雌牛を密かに、35,000円だったと思いますが、ある日本人の農夫に売り、その金を頭割りして同胞に配りました。このようにして、私たちは解決策を見つけ、皆がちょっとしたポケットマネーを得ました。

東京や神戸のような日本の大都市への空襲が激しくなったとき、多くのドイツ人は避難しました。日本には、たとえば東京の北方の軽井沢のように、すでに以前から多くのドイツ人が都市の暑さを逃れるためにサマーハウスを所有していたり、借りたりしていた保養地がいくつかありました。ドイツ人の多くは

このようなサマーハウスに移り、それらの家の冬対策を講じて住みつきました。神戸の近くには、たとえば有馬や宝塚のような温泉がいくつかあり、そういうところにサマーハウスをもっているドイツ人もいました。あるいは、神戸の郊外に引っ込み、そこに落ち着いた人たちもいました。

軽井沢にいたドイツ人にとって、冬の間十分に燃料を得ることも問題でした。軽井沢はなにしろおよそ海拔900メートルのところにあり、暖房には薪を燃やすストーブが普通でした。あつという間に部屋は暖まりましたが、火はすぐに消えてしまい、部屋もすぐにまた冷えてしまいました。私も河口湖でそのようなストーブをもっていました。ストーブの薪が燃えている間は暖かいのですが、夜の室温はマイナス8度になりました。日本の木の家は気密性が悪く、外気の侵入を許してしまうからです。女性や子どもたち、それに自分で薪を集めるには年を取りすぎている人たちを助けるために、日本当局は、ドイツ人が日本の森林職員の指導下で森の木を切り、それを薪にすることを許可しました。私自身、河口湖から出かけて数日間軽井沢で樵として過ごしたことがあります。

(ドイツからのニュースを受け取るのにどんな可能性がありましたか?) 戦争中は日本の新聞とラジオ放送が私たちの情報源でした。日本の新聞は戦争中も2紙が英語で発行されていました。短波でドイツの放送を聴く可能性をもっている人もいました。東京の大使館、正確に言えば、成城で仕事をしていた通信班はドイツから電信でニュースを受けていました。中立国の人間とのコンタクトをもっていた人たちには、別の情報源からヨーロッパの状況について知る可能性もありましたが、外国人の友人をもっていなかった普通のドイツ人にとって情報の入手先はドイツに限られていました。

日本が戦争に負けてアメリカが日本を占領したときに、私はアメリカの進駐軍当局とのコンタクトをとおして、アメリカの軍人向け新聞「スター・アン

ド・ストライプ」を読むことができました。この新聞から私は、ドイツ国内の食糧供給、交換価値、タバコやその他ドイツ人の関心を引くようなすべてのニュースを書き出して週に2回河口湖畔の同胞に話して聞かせました。それで、私たちは戦争直後のドイツについておおよそのイメージをもちました。私たちには、ドイツへ帰れば耐乏生活と復興の時代が私たちを待っているということが分かっていました。

家族の消息はジュネーブの国際赤十字が戦争国と他の国とを仲介して配達していたショート・レターから得ていました。それで送られてくる情報は短く、本当に1文づつのものでしたが、私たちは、家族が生きているのか、戦争の犠牲になったのか、空襲で焼き出されたのか、あるいはどこに住むことになったのかというような大事なことを知りました。それはともかく役に立ち、ある意味で気持ちを鎮めてくれるものでした。

(当時日本で自由に旅行して回ることができましたか?) 1945年5月まで、つまりドイツの終戦まで、大使館員にとって旅行は問題ありませんでした。ほかのドイツ人たちも呉や広島のような内海を除けば旅行は可能でした。

米軍が日本に来たとき、彼らはドイツ人の旅行を少なくとも統制しようとしました。地元警察の管内の移動はいつでもできました。河口湖の私たちにとって、土地の警察管区が3,700メートル以上もある富士山頂まで延びているのは好都合でした。そのために、私たちは、閉じ込められているという感じがしませんでした。医者にかかったり、知り合いを訪ねたり、役所へ行ったりするために、自分の居住区から日本の別の土地へ行かなければならないときには、地元のCIC(防諜部隊)事務所に向向いて、なぜ、どこへ、どのくらいの期間行きたいのか話さなくてはなりません。そうして証明書をもらって翌日出発しました。私たちのところでは、そのような事務所がそれまでドイツ大使館が借りていて戦後は米軍に利用されたホテルのなかにありました。

ドイツが降伏してドイツの民政がもはや存在していなかったために、戦勝連合国がドイツにまず一種の軍事政権を樹立したとき、日本で大使館の活動は当然ながら停止しました。しかし、ほかのドイツ人たちのステータスに変化はありませんでした。ビジネスマンはビジネスマンのままで、オランダ領インドから来た婦女子も以前と変わりませんでした。大使館員だけが今や私人になったのです。ドイツ人のステータスが変わったのは、米軍が日本に上陸したときでした。

米軍によって巣鴨の東京拘置所に拘禁された国家社会主義ドイツ労働者党の高級幹部数名と、大使や武官のような国の高級幹部数名を例外として、誰も収容されませんでした。拘禁された彼らもむしろ尋問を目的として拘束されたのです。米軍当局は彼らに、戦争中のドイツと日本の協力などについて尋問しました。これらのドイツ人の誰に対しても裁判は開かれませんでした。彼らは証言を終えるとまた解放されました。それに数ヶ月かかった人もいました。

日本にいたドイツ人のうち一人だけが米軍に逮捕され責任を問われました。当時の警察アタッシュェ、オーベルツ・マイジンガーです。彼は戦争中ワルシャワの警察長官で、ワルシャワのゲットーで蜂起があったときに人間愛を示しませんでした。彼は、ワルシャワから日本に転属になったときに、ポーランドと連合国により戦争犯罪人のリストに載せられていました。米軍が日本に来たとき、彼らは数日後にマイジンガーを河口湖畔の富士・ビュー・ホテルで逮捕しました。彼らは、彼がピストルを保管していた部屋に行かせましたが、彼は、自ら訴追を逃れる可能性を生かしませんでした。彼は晩にアメリカ軍によって横浜に連行され、そこから飛行機でヨーロッパに送られました。1946年の復活祭の頃、ポーランドの裁判所はワルシャワで彼に死刑を宣告しました。しばらくして死刑が執行されました。

ドイツが降伏し日本がまだ戦っていた時期、つまり1945年5月と8月の間に、

日本にいるドイツ人の間で、もう母国に帰れないのだとしたらどうなるのだろうか、よく話題になりました。当時、日本とドイツの政府機関の間で話し合いが行われました。ドイツ人を気候がヨーロッパに似ている北海道に移すことができるだろう、という提案がなされましたが、この構想は米軍が日本に上陸した時点で消えました。アメリカは、ドイツ人はいずれドイツに帰すという考えを固めていました。それがどれくらい早く実現されるか、というのは別問題でした。というのは、私たちの国が1945～46年頃は戦争による破壊で荒廃しており、また東欧やほかの国々から数百万人のドイツ人難民が押し寄せていたからです。滞日ドイツ人までそのドイツへ移送するのは最初の数年間は不可能だったのです。米軍は本国送還者名簿の作成に着手しました。彼らは、たとえばオランダ領インドから来た女性たちがドイツのどこの出身なのか、そしてそこへ送り帰すことは可能なかどうか調べました。1946年の終わりには、まもなく滞日ドイツ人の本国送還が始められるということが予想できました。

輸送船「マリン・ジャンパー」で運ばれる最初のドイツ人たちが1947年2月に出航しました。このなかには NSDAP（国家社会主義ドイツ労働者党＝ナチ党）の幹部たちや、会社の社長の多くが、そしてオランダ領インドから来た女性や子どもたち数人がいました。この移送は日本からドイツへ直行し、運ばれた人々はルートヴィヒスブルクの本国送還センターに入れられ、だんだんにドイツのいくつかの占領地区へ散っていきました。大使館員とオランダ領インドから来た婦女子の多くを含む本国送還者の第2グループは部隊輸送船「ジェネラル・ブラック」に乗って1947年8月に日本を離れました。この船はまず上海に行き、中国と満州にいたドイツ人を乗せました。それから、スエズ運河を通過してブレーマーハーフェンに行き、乗船していた人々はそこから特別列車でルートヴィヒスブルクに運ばれました。ここで、帰還者たちはドイツに駐留していた米軍当局によって審査され、次第に自分の故郷へ散っていきました。私は、海軍アタッシェの補佐が（彼は海軍大佐だったのですが）職業は何かと尋問さ

れ「船員 (Seemann)」と答えて、アメリカ人の担当官が「彼は水夫 (Matrose) だ」と思いこみ、彼を数日後に解放したのを思い出します。ルートヴィヒスブルクにいたほかの大使館員たちは3週間から6週間そこで過ごさなければならなかったのです。

滞日ドイツ人の第3の、そして最後のグループは、1948年4月に飛行機でドイツに運ばれました。20人くらいでした。日本で占領軍当局による尋問になお時間を要し、ようやく用済みになった人々です。ほかに、病気のために先に出発した2つのグループに同行できなかった数名が同乗しました。

反ナチだったことを証明できたドイツ人や、たとえばユダヤ人でナチの迫害を受けていたドイツ人が日本に残りました。さらに、宣教師や修道女、そして、血縁関係で日本と結びつきが強い人々も残りました。全体的に見て、終戦のときに日本にいた約3,000人のドイツ人²のうちおよそ700から800人が日本にとどまったと考えられます。

ドイツ人の日本への帰還は、1952年に日本と連合国との間の講和条約が発効し、ドイツでも連邦共和国をもって独自の政府をもった国家が存在するようになったときに始まりました。

1937年に若いアタッシュェとして日本に来たとき、私は初めて勤め人になりました。私は当時まだ医学生だった弟を経済的に支えていました。父は死んでいて、母は公務員の未亡人でした。自分自身の家族をもつことは、日本勤務を3年間したあとの6ヶ月間の帰国休暇を得たときになってから考えるつもりでした。運命はそのようにはさせてくれませんでした。戦争のために私は10年間日本にとどまり、帰国したときは難民でありまた失業者になっていたのです。おまけに私はポーランド領になった私の故郷、シュレージエンに戻れませんでした

2 当時の在日ドイツ人の正確な人数は不明。クラブフ氏は約2,000人としている。153頁参照。

た。私は生まれて初めてドイツ西部に行きましたが、当然ながら土地の女性たちのなかからすぐに結婚相手を見つけることはできませんでした。1961年に総領事として神戸に来て大阪府知事を訪問したとき、彼は私に結婚しているかどうかたずねました。私が「閣下、これまで私はその機会に恵まれませんでした」と言うと、府知事は「私が仲人をしてふさわしい伴侶を世話をしてあげましょう」と言いました。私は「閣下、在台湾の日本大使、吉沢さんは、79歳で結婚されました。それまで私にはまだ25年以上あります」と答えました。それを聞いて佐藤知事は笑い、その考えを取り下げました。

(聞取りは1995年8月8日に神戸において行われた)

2. フランツ・クラプフ氏の体験

Franz Krapf : 1911年7月22日ミュンヘン生まれ。1932年9月1～15日日本旅行。1935年1月30日から1937年3月20日まで交換留学生として東京帝国大学に学ぶ。1940年7月15日から1947年8月20日まで在日ドイツ大使館経済班に勤務（1945年5月までは東京の大使館において、以後1947年の「ジェネラル・ブラック」による本国送還まで軽井沢において勤務）。1966年1月から1971年までドイツ連邦共和国大使として東京に勤務。その後、NATO 常任代表（大使）に就任。

私は交換留学生としてアメリカに留学したあと初めて日本に行きました。2週間だけの滞在でしたが、日本に興味をおぼえ、日本を好きになるのには充分でした。これが後の日本滞在の基盤になりました。それに、大学に通ったミュンヘンで二人の日本人の兄弟と知り合ったということもありました。

私はミュンヘンで国家学を学びました。交換留学から帰国して8ヶ月後に私は卒業試験を終えました。外務省の最低入省年齢は25歳で、私は21歳でした。そこで私はその年齢に達するまでの時間をつぶすため、あの日本滞在や日本人との交際がきっかけになって日本語を勉強することにし、ベルリン大学東洋学科で日本語の履修登録をしました。旅費も支給される2年間の留学の募集が日

本側からありましたが、支給される奨学金は充分でなく、月額70円でした。結局、私はその奨学金を DAAD (ドイツ学術交流会) をとおして受けることになりました。DAAD には当時ナチスの親衛隊員の元准将が臨時会長に送りこまれていました。この男は日本については何も知らず、ほかの外国についてもほとんど知りませんでしたが、人の好い人物でした。彼は「よくお聞きなさい。こんな金では生活できませんよ」と言ったのですが、これで彼の負けが決まったようなものでした。私は「自分自身の経験からそれは分かっています。でも、たぶん少し稼いでその足しにできます」と言いました。こうして私はその奨学金を獲得しました。

私が日本で最初につづった問題は、住まいを見つけることでした。小さな一戸建ての家を借りるのは簡単でした。家賃が安かったのです。それでも当時の私には少し高すぎました。私はまず、大学入学準備中の日本の高等学校の生徒たちや、ドイツ語を習得していなければならなかった医学部や法学部の大学新入生たちにドイツ語を教えていたドイツ人の女性教師のところにも身を寄せました。私が彼女の家に住んだのは短い間でした。彼女は、当時テイコク・ダイガクあるいは短くテイダイと呼ばれていた現在の東京大学の近くに住んでいました。ドイツ人の留学生を受け入れてくれる人が見つかったのです。その人は検事長の花井忠氏でした。神田の花井家は今でもあります。3階建てのコンクリートの家で、当時はもちろん周囲の日本家屋のなかで目立っていました。花井家には3人の息子がいました。長男は11歳だったと思います。子どもたちとつきあい、単純な日本語を聴くのは私にとって非常に有益でした。

私はそういう日本語をたくさん聞くための別の可能性を探し、慶応大学の幼稚舎で希望がかなえられることになりました。3ヶ月間、慶応の11歳の生徒たちのクラスに通い、算数や体育ではなく、読本や地理や歴史など、言葉を覚え

るのに役に立つ科目の授業を一緒に受けました。授業中、ほかの生徒たちが使っていた私には小さすぎる机の間に特別の椅子が私のために置かれました。生徒たちは、私が指名されて読本を読まなければならないときには囁いて教えてくれました。私はもちろんこのクラスの関心の的であり、自慢の種にもなりました。しかし全体として見れば、すべてうまく行き、私の日本語学習の役に立ちました。

日本語の勉強を続けるのに、別のコネも役に立ちました。アメリカ人との関係です。アメリカ大使館には、イギリス大使館などでも同様でしたが、よく考えられた語学学習プログラムがありました。アメリカ大使館にはいつも、外交任務や軍務のために30名から35名が語学教育を受けていました。ちなみに、このコースからは参謀総長たちやその他の著名な人々が出ています。この教育プログラムはナガマ・ナオエという名前の先生が作りあげたものでした。本来はアメリカ人のためのものでしたが、私は何とか潜り込むことができました。このプログラムはとくに、クラスごとに授業をするのではなく、教師たちが個人の家に出かけて生徒それぞれの程度に合わせて教えるという点で優れていました。それはもちろん理想的でした。コースは、話すこと、書くこと、読むこと、そして試験で構成されていました。

ドイツ人留学生の監督を委嘱されていた日独文化協会でも時々試験が行われました。私が外務省への入省を希望していることを知っていたドイツ大使館は、私がうまくやっているか、私の日本語はどうか、関心をもっていました。

日本留学中、私はおもに日本語の勉強をしていましたが、お金も稼がなければなりません。私はドイツ大使館で働き、ちょっとした仕事を引き受けて報酬をもらっていました。

こうして私はやりくりし、まもなく若いドイツ人の商社員と一緒に小さな家を借りました。私たちは、料理をしてくれるメイドも一人雇いました。給料は

現在では考えられない程度のものでした。月に30円払っていました。私は古い自動車も買いました。それには70円支払いました。運転免許証をとるのは当時の日本では非常に大変でした。日本人は外国人が車で走り回るのが好まなかったのです。フォードやジェネラル・モーターズのテスト・ドライバーでも、彼らが運転許可を得るまで、決まって何度も試験に落とされていました。しかし、私は1回の試験で合格しました。運転免許試験を受けるためには書記に申請書を書いてもらわなければなりません。警察署長のところに書記たちがいて、申請書をきれいに書き上げてくれました。それに口頭試験と筆記試験もあり、それに合格して運転免許証をもらいました。私の車の番号は「長野174」でした。長野県の軽井沢でその車を買ったからです。

私は半年ほど花井家で過ごしました。あの家ではいつも和食が出されました。ときどき私は銀座の安く食べられるレストランや、帝国ホテルや、上等の魚料理を出す東京会館にも出かけていきました。東京会館の魚料理は高級レストランにも劣らない魚料理が80銭でした。タクシーは東京市内が約50銭で、横浜まで1円でした。夜になって、運転手が客を見つけられなくなるともっと安くなることもありました。週末にタクシーをチャーターすると、日曜日全日借り切っても3円から4円でした。

私は最初の正規交換留学生でした。私の前にも交換留学生が一人いましたが、そのひとは別のルートで日本に来ていました。つまり、ライプチヒ大学と東京のある大学との関係によるものでした。私のあとにはヴァルター・アドラーが来て、そして後にはリヒャルト・プロイアーが来ました。当時は1年に4人の交換留学が計画されていたと思います。

ドイツ人や他の外国人とは大使館を通じて付き合いがありました。それは、もちろんひとつには私の外交職への関心から、そうして人脈をつくるためだっ

たのですが、若い外国人が少なかったという事情からでもありました。男が一人足りないというパーティーがあれば、よく呼ばれました。ほかの好ましい付き合いはドイツ人家庭とのものでした。学生だった私はいつも腹をすかしていることが知られていました。いくつかの家庭で私は週1回本格的な昼食をご馳走になっていました。その回数もだんだんに増えていきましたから、私はもっぱら和食で栄養をとっていたわけではありません。

私の日本滞在は2年間で、ベルリン大学の東洋学科の試験に間に合うよう1937年6月はじめに帰国しました。東洋学科は当時すでに外国カレッジ (Auslandshochschule) と呼ばれていました。私は試験に合格してつなぎの仕事を探し、ベルリン独日協会に職を得ました。しばらくして外務省の入省試験がありましたが、私は日本語ができたために難なく合格しました。独日協会で日本人との付き合いを続けていたからです。当然ながら、私は外務省の東アジア課に約1年配属されました。それから、いかにも人事政策的なやり方ですが、エジプトへ送られました。1939年春のことでした。エジプトはイギリスの指示でドイツとの関係を断ったために、私たちは1939年10月に捕虜交換されました。驚いたことに私はすぐにモスクワに配属されました。しかし、それも長くは続きませんでした。10ヶ月後にベルリンの人事部から、東京の大使館が日本語を話す若い人間を探している、という連絡が届いたのです。それで私はシベリア横断鉄道で東京に向かうことになりました。

東京で私はまた経済班で働きました。短期間でしたがオット大使の秘書室にもいました。オット大使を私は留学生だったときから知っていました。当時彼は武官でした。

日本とドイツの直接の交易は、最初のうちはまだソ連経由や、一部は封鎖破り船によって行われていましたが、ほとんどの部門で停滞していました。しか

し、中国の日本に統制されていた地域や、インドネシアをはじめ、日本が占領を進めていった東南アジア各地では交易が行われていました。これらの地域では、タングステン鉱や、いろいろな加工鋼や生ゴムなど、ドイツにとって重要な、少量でも価値があった原料が手に入りました。ドイツでは人工ゴムの生産が発達してはいましたが、それでも自然のゴムや医療用のさまざまな原料が必要でした。

経済班のほかの仕事はドイツ人社会への食糧供給でした。およそ2,000人のドイツ人がいて³、後には、戦争勃発により夫が現地に収容されたいわゆる「蘭印婦人」数百名が加わりました。当然、この捕虜交換で日本に送られてきた蘭印婦人やその子供たちにも食糧を供給しなければなりません。このような食糧供給の仕事も大使館の経済班に回ってきました。

私たちは皆よい家に住んでいました。戦争が始まり外国人が住んでいた家の多くが空家になっていたからです。しかし、それ以前は日本家屋を借りるのは本当に大変でした。あとになって私は、渋谷にあったいわゆるナガイ・コンパウンドに住みました。それまでここに住んでいたのはほとんどがアメリカ人で、ドイツ人も何人か住んでいました。15から20棟の西洋スタイルで建てられた集合住宅で、外国人に賃貸されていました。公園のような集合住宅で、多くの木が植えられ、その間に緑地帯もありました。もちろん全部木造でした。私の家も1945年に焼夷弾にやられてしまいました。あれで、何もかもなくなってしまいました。

ドイツと日本の関係は戦争中すでに緊張していました。唯一の緊密な協力関係が海軍にありました。ドイツ海軍は日本に多数の兵力を送り、多くの職員が

3 すでに見たように、ガリンスキー氏は約3,000人としている。147頁参照。

勤務する事務所もかまえていました。彼らは封鎖破り船や潜水艦の支援をし、日本人と良好な関係をもっていました。ドイツ大使館には非常に声望の高かった海軍武官、パウル・ヴェネッカー提督がいました。彼は非常に立派な人物で日本人に重んじられていました。

しかし、日本とドイツとの政治的協力はほとんどありませんでした。そのことは、日本がソ連とドイツ帝国の休戦をスターリングラードに仲介しようと再三試みたときに、悲劇的なかたちであられました。ベルリンはこれを頑なに拒否したのです。その後、日本は、ドイツの占領地域の東端から日本の占領地域の西端へ（ビルマということになるはずでした）飛行機を飛ばし、この問題について討議できる代表団を送るようドイツ側に提案しました。ベルリンは、それは技術的に不可能だと答えました。もちろん、それは可能でした。そして、可能であることがすぐにイタリア人によって証明されました。突然、一人のイタリア人が飛来したのです。彼は代表団ではなく、書簡だけを乗せてきました。そのなかには、たとえば私宛ての外務省からの請求書もありました。モスクワの事務所の未払いの賃貸料、24.7マルクの請求書が届きました。結局、日本側は我慢できなくなり、自ら代表団を送りました。この代表団はおそらくビルマから出発しました。しかし、彼らは到着することなく、消息を絶ってしまいました。実に悲劇的な展開でした。

スパイに対する不安はもちろんリヒャルト・ゾルゲ事件のために強くなりました。ゾルゲは先の大戦でもっとも成功したスパイでした。ちなみに、ゾルゲはドイツ大使館からも重要な情報を引き出した、とよく言われますが、それは間違っています。ドイツ大使館はそのような重要な情報をもっていなかったからです。逆に、大使館の方が戦前にはゾルゲから情報を得ていたのです。その理由は知られていませんが、フランクフルト新聞の特派員だった彼は、潜在的な革命サークルと緊密な関係をもっていたからです。そして、彼はそこで得た情報を大使館にわたしていたのです。ゾルゲは確かに大使館から情報を得ては

いましたが、それらは戦況を左右するほど価値のあるものではありませんでした。彼は、そのような情報を彼の日本人の仲間、尾崎秀実から直接手に入れていました。尾崎は日本の首相の秘書で、秘密の閣議に同席していました。そこでの話が直接ゾルゲに伝わったのです。もっとも重要な情報はおそらく、日本は中立を守り、そのためにソ連はシベリアの精鋭部隊を引き上げ、これを西に送ることができるようになるだろう、というものでした。

私は、誰もゾルゲの活動に関して疑いをもっていなかったと思います。私は彼をよく知っていました。彼は実に多くのパーティーに顔を出していました。私がモスクワからやって来たとき、1940年の夏のことでしたが、彼は私の方へ飛んで来て「クラブフさん、独ソ関係が悪化しているという噂を聞きますが本当ですか」と聞きました。私は「いいえ。私がモスクワで知り得た限りでは、そんなことはありません」と答えました。しかし、私の情報は、優秀なロシア専門家だった大使、フォン・デア・シューレンブルク伯爵から得たものだけで、伯爵は「独ソ関係はドイツにとって非常に価値があり、そのために戦争は終わるかもしれない。私たちはもう第1次大戦のときのように飢えるわけにはいかないのだから」という意見でした。すると、ゾルゲは一息ついて「ああ、それを聞いて安心しました」と言いました。しかし、私はそんな彼のことばに何の疑いもちませんでした。それで戦争が終わるのならよいことだと感じていたからです。ゾルゲのような人物が大使館に出入りしていたということは、当然日本側の不信感を招きました。彼は、大使からも服務義務を課せられていて、ドイツ人社会のために、ラジオから得た情報をまとめて毎日情報誌を出していました。

ゾルゲ事件のあと、日本人はドイツ人との付き合いに以前より用心深くなりました。しかし、私はその影響が日常生活にまで及んだとは思いません。一度だけ、1943年だったでしょうか、田舎を車で走っているときに嫌なことがあり

ました。私が、観光地ではなく、東京から100キロか150キロほど離れた田舎の路上で道をたずねていると、そこへ別のひとがやって来て「外人、だめだめ」と言われました。

日本より先にドイツで戦争が終わり、私たちの状況は激変しました。ドイツの条約違反が非難され、私たちはそのために敵とみなされたのです。中立国の人間との交際は禁じられました。それは私にとっては問題でした。私の婚約者がスウェーデン人だったからです。日本人との社交的な付き合いも禁じられました。私たちは、生活を維持するのに必要な範囲でのみ日本人と接触することを許されました。

ドイツが降伏すると大使館は閉鎖されました。ある意味で合法的に仕事を続けていたのは海軍武官一人でした。彼の部署は閉鎖しなければならなかったのですが、彼は日本側とやるべきことをたくさんもっていました。彼にだけは大使館閉鎖後も自家用車の使用が日本側から認められていました。それは彼が高く評価されていた印でした。合法的あるいは半合法的にゲシュタポ（ナチスの秘密国家警察）の代表、ヨーゼフ・マイジンガー大佐が仕事を続けていました。日本の憲兵隊が、日本に残っているドイツ人を取り締まるため彼に協力を要請していたのです。彼に協力させて、憲兵隊は疑わしい人物をピックアップし、疑われた人々はすぐに監獄に消えました。そのうち何人かの命はマイジンガーのために失われたのです。同僚のクルト・リュッデ＝ラートと私はそのことを耳にしていました。私たちは大使館閉鎖に関する問題で外務省に呼ばれたときに、黙ってはいませんでした。外務省はその後、マイジンガーの活動を禁止しようとしていました。しかし、またしても憲兵隊が介入してきたのは明らかでした。マイジンガーがその後、あの二人は銃殺にすべきだ、と言っていたのを聞いた人々がいます。

日本の終戦を私は軽井沢で経験しました。軽井沢では私のほか数人のドイツ人が非合法に短波ラジオをもっていました。戦争中の受信状態は現在よりよいときがあるほど良好でした。当然ながら、どの国も自国のプロパガンダを強い電波をもつ放送局から流していたからです。ドイツの終戦後、私はアメリカのニュースを聴いていました。サンフランシスコ放送が一番よく受信できました。この放送局のニュースは朝によく入りました。8月のはじめ、私はまだベッドにいましたが、ラジオで、空に広がる色のついた雲の話をしていました。それで私は妻に、物語を放送しているようだからニュースの時間が変わったようだ、と言いました。しかし、同じ日のうちに、原子爆弾のことだったということが分かりました。それから、2番目の原子爆弾が長崎に落とされました。それで終わりでした。

この時期、私たちは本当に大きな問題もなく過ごしました。一定の食料を受け取り、煙草も配給されましたが、妻も私も煙草を吸いませんでしたから、ドイツ国内と同じように、それを重要な支払手段にしていました。闇市のことは誰でも知っていました。あちこちで買うことができ、買い方も知っていました。たとえば、米はグラム単位ではなく、袋で買うというようなことです。私たちはまだ十分に交換物資をもっていました。わが家には賄いもいましたし、本当に嘆く理由はありませんでした。

私は当時すでに軽井沢に住んでいて、大使館がまだ活動している間、週日は東京に行っていました。3月のことでしたが、東京の私の家も大使館も焼け落ちてしまいました。

太平洋戦争が終わるとすぐに米軍がやってきました。それも妻と私にとっては悪いことではありませんでした。日本語の勉強をしていたときに知り合った日本の専門家たちが来たからです。彼らはその頃には高い地位についていて、

よく面倒を見てくれました。私たちは、もはや秘密事項ではなくなっていた、日本に関して考えられる限りのすべてのことについて聞かれました。

米軍はまず約50名のドイツ人を拘束しました。ナチの要職についていた人々や、アメリカにとってあとで経済上の競争相手として厄介になりそうな人々でした。しかし、経済上の理由で拘束された人々はまもなく解放されました。半年間、私たちは監視されていました。しばらくすると、CIC（防諜部隊）も軽井沢にやって来ました。彼らは軽井沢に事務所を開き、私たちは個別に尋問を受けました。私たちの行動の自由は住んでいる県内に限られました。私たちの場合は長野県内で、鉄道で3時間走れる距離でしたから、結構動くことができました。歯医者に行くというような正当な理由があれば、いつでも東京に行く許可も得られました。

その後、本国送還ということになりました。それはある種の深刻な事態でした。ドイツ人は集められ、ドイツ行きの2隻の船に乗せられました。まずは「不快なドイツ人」が、次に「不快でないドイツ人」が乗せられました。私は後者に入っていました。私たちはルートヴィヒスブルクの収容所に入れられ、もう一度尋問を受け、だんだんに解放されました。この時期は日本での戦後よりもはるかにひどいものでした。私たちはもうドイツに縁故がなくなっていたからです。日本で私たちは、はじめは通常の食糧配給を受けていましたし、アメリカ人が来てからは、彼らが、私たちに再び外交官用の配給をするように指示してくれたため、煙草やほかの物資も与えられていました。そして、本国送還のときには、私たちはほとんど無制限に荷物をもっていくことを許されました⁴。

（聞き取りは1995年11月30日にボンにおいて行われた）

4 携行荷物の制限を受けなかったというのは外交官でも特例だった。たとえば、次に登場するプロイアー氏は荷物を減らすのに苦労している（174頁参照）。クラブフ氏自身も言っているように、アメリカ人とのコネがものを言ったということだろう。

3. Dr. リヒャルト・ブローイアー氏の体験

Dr. jur. Richard Breuer : 1912年 8月 2日 ロンドン生まれ。1937年から1938年まで交換留学生として東京に滞在。1940年から1947年まで東京のドイツ大使館館員。1947年、「ジェネラル・ブラック」に乗り横浜から上海を経て本国送還。後に、1966年から1969年まで東京のドイツ大使館に勤務。その後、外務省勤務。

1932年に大学入学資格試験を終え、私は父と同じように医者になるつもりでした。しかし、父は私に思いとどまるようにしつこく忠告しました。当時はベルリンだけでも700人以上の医者が社会福祉の保護を受けていたからです。

私の父は東アジアの美術に興味をもっていて、相当数の中国と日本の美術コレクションをもっていました。父は私に、東アジアの美術史を学んで美術商になる気はないか、とたずねました。「これは面白い国際的な活動分野だよ」と。そうすれば、父がもっていた中国や日本の絵の画題を読むのを私が助けられる、ということもありました。

たまたま、私の友人の一人がベルリンの東洋学科で中国語を学んでいて、中国語がどれほど面白いか私に話してくれたという偶然もあって、私も東洋学科に中国語の履習登録をして、4年後に、中国語、中国文化、中国経済の卒業試験を受けました。最初受講生は私たち2名だけで、最後も7人か8人だけでした。そのかわり、私はオットー・キュメル教授の東アジア美術に関する講義を聴き、友人と同様、法学も聴講しました。

1934年に東洋学科で中国語の卒業試験を終えたあと、これだけでは職業に就く準備としては不十分だと思い、法学を修めることに決めました。そこでミュンヘン大学に行き、法学に集中して、1936年に第1次国家試験（上級公務員候補者試験）に合格しました。

個人的関心があったのと、ナチの圧迫から逃れるため、私は外国に行きたいと思いました。私の中国語の知識を生かして中国行きの奨学金に応募し、中国で法学の学位請求論文のテーマに取り組むつもりでしたが、チャンスはありませんでした。年に2、3の奨学金しかなく、これらが中国学を主専攻とする学生に与えられていたからです。

1936年11月25日に日独防共協定が結ばれたことは私にとっては幸運でした。文化的関係の促進のために両国は語学力の証明を下敷きとした奨学金を出すことになったのです。私の指導教授に、学位請求論文を日本に関するテーマで書いてもよいかどうかたずねたところ、教授は、日本との協力という点で今とくに面白いテーマだ、と言ってくれました。

そこで、私は再び DAAD（ドイツ学術交流会）の日本行きの奨学金に応募しました。口頭試問で私は、日本人は6世紀に中国の文字を同じ意味で取り入れたのだから、中国語は日本と多くの点で同じものであり、したがって私の中国語の知識は条件を満たしている、と説明してみました。DAAD の人間が日本語は根本的に中国語とは異なるものだということを知らなかったのは明らかで、日本語ができる応募者もおそらく少なかったので、私は東京帝国大学で学ぶ奨学金を得ることになりました。しかし、出発前に日本語を特訓しておいた方がよいと言われ、ベルリンの日本研究所のラミング教授について勉強しました。

1937年に私は鉄道でシベリアを経由して日本に行きました。東京駅に着いたとき、私は「入り口」「出口」と「男」「女」を読むことはできましたが、自分の言いたいことを理解させることはできませんでした。私は交換留学生の面倒をみていた日独文化協会に行きました。当時、そのドイツ人館長は著名なドイツの教育学者、エドゥアルト・シュプランガーでした。私は彼に、学位請求

論文のために、日本語で書かれたものしかなかった資料や法律を翻訳したり分析したりできるようにできるだけ早く日本語を学びたい、という希望を説明しました。そのための最良の方法は、教養のある日本人家庭に下宿することだと思います、と私が言うと、彼は「それはたいへん難しい。日本人は非常に閉鎖的な家庭生活をしているからね。私の知る限りでは、日本人家庭に受け入れられた外国人は一人もいません。でも、あちこち聞いてみましょう」と言ってくれました。

数日後、シュプランガー教授は私を呼び、「あなたはたいへん運がいい。日本の最高裁のミヤケ・ショタロウというひとが、彼の家の2部屋をあなたに使わせてくれるそうです。彼には就学義務年齢の子供が二人います」と言いました。そして、シュプランガー教授に、この二人がドイツで勉強することになったら、そのときには彼らを私の家に住まわせることができるか、と聞かれたので、私は「はい」と答えました。

その二日後に私は一番いい背広を着て、ミヤケ家に行きました。その家は、東京の一等地、麻布にあり、松と竹を植えた小さな日本庭園のなかにありました。

奥さんは背の高いすらりとした日本女性でしたが、膝をついて私を迎え、私が靴を脱いで用意されていたスリッパを履くと、2階建ての日本家屋に増築されていた石造りの小さな別棟に案内してくれました。彼女が出て行くと、ミヤケ氏が入ってきました。彼は奥さんと同様、日本人としては大きく堂々とした体軀のひとでした。彼は私にまずドイツ語で挨拶しましたが、その後は私と英語で話しました。わずかしかドイツ語ができなかったからです。少し話をしたあとで、彼は私に、彼の家で日本式に暮らせると思うかどうかたずねました。彼の奥さんと10歳と12歳の子供たちは日本語しか話さないし、彼は家を空ける

ことが多い、ということでした。私が「はい」と答えると、彼は、「母屋の2階の畳敷きの2部屋をお使いなさい。あなたは畳の上に敷く布団で寝なくてはなりません。しかし、次の間には机と椅子を置いてあげましょう。部屋代は要りませんが、食費は払ってください」と言いました。私が同意し、そのあとすぐに居心地のよくなかった洋風ホテルからミヤケ家の日本家屋へ引っ越しました。

私にとってこれ以上の幸運はありえませんでした。ミヤケ氏を通じて、私の学位請求論文のために重要な助言を与えてくれる日本の法律家とのつながりができただけでなく、あの家族に息子のように受け入れてもらったのです。私がかうまく自分の言いたいことを表現できないときには、ミヤケ夫人は私の目からそれを読み取ってくれました。気詰まりだったのは、晩に私が最初に風呂に入ると、もちろんあらかじめ石鹸で体を洗ってから浸かったわけですが、私のあとに家族が風呂に入ったことでした。軽い日本食に私はすぐに慣れましたが、時々ドイツレストランのローマイアーに行ってステーキを注文しました。

ミヤケ家には小さな仏壇があり、その前に一膳の御飯や果物などが、ときには酒も、先祖の霊のために供えられました。その仏壇は几帳面に掃除されていて、食物は定期的に取り替えられていました。ミヤケ夫人は、重要なことを決めるときには家族が仏壇の前に集まって話し合いをし、彼らの決定に同意してくれるよう先祖にお願いするのだ、と私に話してくれました。

この家族と暮らして、日本の女性は決して抑圧されていないということを知りました。ミヤケ夫人は、何を食べるか決めていただけでなく、私たちが外出するときには彼女の財布から金が出され、彼女の意見は家族に関係のあるすべての決定に重みをもっていました。ミヤケ氏は、著名な法律家であっただけで

なく、よく知られた歌舞伎評論家でもありました。彼は私を時々公演に連れていってくれ、話の筋や歌舞伎俳優の芸の微細な点について説明してくれました。私が歌や台詞から何も理解できなかったからですが、私は広い舞台の上で展開される芸術的な美に強い感銘を受けました。

毎日家に来てくれた個人教師や、お互いに言葉を教えあっていた日本人の学生たちのおかげで、私の話し・書き・読む力は間もなくかなり進歩しました。当時はまだ帝国大学だった東京大学の法学の講義には数回出席しただけでした。あまり理解できませんでしたし、「日本における検察の地位、その発展と現在の状況、およびドイツ法との主要な差異」という私の学位請求論文に役立つことは学べなかったからです。

おそらく東京のあるレストランで感染したアメーバ赤痢のために私の仕事は後戻りさせられることになってしまいました。1週間私は日本の赤十字病院に入院し、ミヤケ夫人がほとんど毎日ちょっとした見舞いの品をもって訪ねてくれました。再び家にもどると、彼女が私の胃によい特別料理を作ってくれたので、まもなく元気になりました。蒸し暑い8月には東京の北の方あったサマーハウスと一緒に連れて行ってもらいました。彼らはその家を2週間借りていました。散歩しながらミヤケ氏と東アジアの政治や経済の展開についても語り合いました。彼は中国における日本の軍事的拡大を慎重に批判し、とくに1937年に市民の大量殺戮を行った南京の日本軍の行き過ぎを非難しました。当然そのことについては日本の新聞には何も書かれませんでした。

奨学金はとても少なかったので、奨学生たちは私も含めて、本を買ったり、旅行をしたり、ドイツへ帰ったりすることができるようにアルバイトをしていました。私はあるドイツの経済機関のために短い記事を書いたりドイツ語を教

えたりしていました。生徒のなかには日本の実業学校の教師のグループもいて、彼らは授業のあと時々私をダンスホールに連れて行ってくれました。そこでは西洋音楽ののってフォックストロットやタンゴをホール所属の女性たちと踊っていました。彼女たちは全員一列になって座っていました。私は彼らと飲み屋でビールを飲むよりこの方が好きでした。実業学校の先生たちはお別れに、高価な木版の日本地図をプレゼントしてくれました。このグループや他の生徒たちとの交際から、日本での生徒と教師の関係はドイツよりもずっと親密で個人的だという印象を受けました。

私は学位請求論文のための資料を十分に集め、関連する法律をひとりの日本の法学者と一緒にドイツ語に翻訳したあと、親しくなった奨学生のギュンター・シューベルトとヨーロッパ・ハウスに引っ越しました。この家はドイツ大使館の書記官が以前に借りていたものでした。そこで私は学位請求論文をタイプライターで打ち、日本をもっとよく知るためにシューベルトと一緒に北や南へ旅行しました。印象深かったのは、日本の鉄道の清潔さ、時間厳守、礼儀正しさでした。列車が遅れると、車掌がプラットホームで深くお辞儀をして謝罪し、「乗客の皆様が、遅延のため不愉快な思いをなさらなかったことを望みます」と言いました。旅は荷物が少なくて済んだという点で快適でした。日本の旅館には浴衣、歯ブラシ、歯磨き粉、髭剃りなどが（どれも大会社の宣伝用のサービス品でしたが）あったからです。

比較的大きな旅としては、ギュンター・シューベルトと一緒に行った満州旅行があります。満州の経済的發展についてドイツの新聞に寄稿するつもりだと告げて、満州鉄道の一等の無料乗車券を手に入れたのです。宿代を節約するために夜は一等の寝台車で眠り、町から町へと移動しました。この機会に私は遠く奉天で建築士として働いていた伯父を訪ねました。長く中国に生活していた

多くのドイツ人と同様、彼も中国びいきになっていて、日本人を尊重していませんでした。彼とのかなり長い議論のなかで、私は、ドイツ人が残念ながらふたつの陣営に分裂してしているという見解を主張しました。ドイツ人は、中国びいきか日本びいきかになっている、と。そして、私は彼に、ドイツ人としてそのどちらでもあるべきではなく、中立で、ドイツびいきであるべきだと、と言いました。

もうひとつの大きな旅行を、東京のドイツ大使館を訪れた賓客の随員としてしました。ドイツ帝国食糧大臣（1922—23年）とドイツ帝国宰相（1925—26）を歴任したハンス・ルターです。彼は在ワシントンのドイツ大使の任務を終えて東アジア経由でドイツへ帰るところでした。私は彼と一緒に経済関係機関や東京近郊の農園を視察しました。それらの農園は米作中心で、したがってドイツの農業とは根本的に違っていました。その後彼は、ギュンター・シューベルトと私を北京まで随行するよう誘ってくれました。

それは私にとって最初の北京訪問でした。私は天壇公園や故宮の建築、多くの小路、無数の工芸品店や屋台に感激しました。しかしまた、一般大衆や苦力たちの貧しさにも心を打たれました。ルターが発ってからさらに数日、私はギュンター・シューベルトと北京にとどまり、万里の長城と明の十三陵を見学しました。

帰りの道中で私は突然病気になる、痛みはなかったのですが、日に日に弱っていく感じがしました。ギュンター・シューベルトは私のトランクをもたなくてはなりません。私たちはできるだけ早く日本へ帰ることに決めました。九州で私たちは別府温泉に逗留し、日本人の医者に診てもらいました。その医者はすぐに、私は40℃の熱があり、おそらく肺炎だと診断しました。彼は私に

解熱の注射をし、安静にしているようにと指示しました。2日後、彼はホテルにいた私のところに来て、検査をさらにしたところ、肺炎ではなく、おそらくチフスだと言いました。九州にはヨーロッパスタイルの病院がなかったので、できるだけ早く大阪か東京のヨーロッパスタイルの病院に行った方がいいと勧めてくれました。「本来なら、チフスの疑いで今すぐにもあなたを隔離しなければならぬのですが、ヨーロッパスタイルの病院で治療される方があなたにとってよいでしょう」と。別府から大阪まで、当時は汽車で12時間くらいかかり、私の状態ではお話になりませんでした。幸い、小さな水上飛行機が別府と大阪の間を飛んでいて、私たちは翌々日の席を予約できました。ギンター・シューベルトは大阪のドイツ領事館に連絡し、私を迎えに来てくれるように頼みました。医者は同意し、私の体温を数時間平熱にしておくため、また注射を打ってくれました。

ふらふらする足取りで、小さな鞆をもって私は飛行機に乗り込みました。ひとりのパイロットと6人の乗客を乗せた単発の小さな水上飛行機でした。天気は理想的で、晴れていて風もなく、視界は良好でした。日本のもっとも美しい景色の上を飛ぶフライトでした。大小多くの島々の浮かぶ内海です。それは午後で、太陽が赤みを帯びた金色のパールで辺りを包み込んでいました。身体が弱っていたにもかかわらず、私はこの光景に感激していました。パイロットは彼の横にあった箱から清涼飲料を出して私たちに渡し、目の前の島々の名前を教えてくださいました。突然、安定していたエンジン音が何度か途切れ、プロペラ機のエンジンがおかしくなり始めました。すると、パイロットは「残念ながら飛行を続けられません。エンジン故障のため緊急着陸しなければなりません、海が静かなので危険はありません」と告げたのです。滑空飛行で彼はだんだんに高度を下げ、小さな島の砂浜のすぐ近くに着水させました。パイロットは他の乗客たちと私を背負って浅瀬のなかを浜辺まで運んでくれました。そこで私

は砂に腰をおろし、考えを整理し、速く打っている心臓を鎮めようと思いました。というのは、注射の効果がすでに消えてしまっていて、熱が再び上がっていたからです。パイロットは私たちに「近くの村まで行って、皆さんを大阪へ運ぶ代替機を電話で頼んできます」と言いました。

本当に、2時間後に代わりの飛行機がやって来て、私たちを大阪へ運んでくれました。大阪では感じのよい領事が私を迎えに来て、総領事を診ている日本人医師のところへ連れて行ってくれました。その医者はチフスだと診断し、すぐに大阪の病院に行くように勧めました。しかし、私は東京まで行くと言い張りしました。長い話し合いのあと、医者は私に「あなたがどうしても東京に行きたいなら、ご自分の責任でそうなさい」と言い、注射を一本打ってくれました。領事が東京の日独文化協会に連絡を入れ、私を寝台車に乗せてくれました。

今までで最悪の夜でした。私の寝台はその車両の最後尾にあり、次の車両の緩衝器に近い車軸の上にありました。当時のレールは溶接されていませんでした。小さな振動でも衝撃のように熱のある私の頭と身体に伝わってきました。眠るなどということは考えられず、私は、夜が終わらないのではないかと恐れしました。しかし、なんとかその夜を耐えました。かろうじて東京で起き上がることができ、プラットホームに、日独文化協会のシュブランガー教授の後任、ドナート博士が見えたときには嬉しくなりました。

私たちはタクシーに乗り、東京でもっとも西洋式の設備の調っている病院だった赤十字病院に行きました。ドナート博士が看護婦と交渉している間、私は受付ロビーに座っていました。片方の耳にその会話が聞こえ、私を入れる空き部屋がないのだということを理解しました。そこで、私は立ち上がり、切羽詰った調子で「それは不可能です。緊急事態なのです。九州から高熱で長旅をしてきて私の体力は尽きています。この病院は私を受け入れる義務があります。私を治療を拒むというのは無責任です」と主張しました。それから私は気を失

い、ようやく清潔な広い部屋の白いシーツの掛かったベットのなかで目を覚ましました。ベットの脇には美しい日本人の看護婦が立っていて、私に微笑んでいました。奨学生の日本語力を試験していたドナート博士はあとで「君は試験を受ける必要はないよ。病院の受付での説得力のある演説で君の日本語力は十分に証明されたからね」と私に言いました。

3週間の入院中に、私は再び、日本人の看護婦たちが非常に神経が細やかで、礼儀正しく、親切だということ、そして日本人の医師たちがドイツ語の医学専門用語だけでなく、多かれ少なかれドイツ語を話すということを知りました。退院するとドイツ人の弁護士、フォークト一家が私を横浜の彼らの家に引き取ってくれました。行き届いた看護とよい食事のおかげで、私はまもなく元気になりました。フォークト氏は以前は東京のドイツ大使館の法律コンサルタントをしていて、その後独立し、日本でもっとも重要なドイツの弁理士事務所を開いていました。彼は日本語の読み書きに堪能で、とても音楽的なひとでした。晩には歌の勉強をした奥さんにグランドピアノで伴奏をつけていました。彼からは私の学位請求論文のための助言も受け、私はそのおかげで論文を書き上げることができました。1938年11月に私は日本を去り、アメリカ経由でドイツに帰りました。サンフランシスコでは1週間滞在し、素晴らしい町並みと、公園のような敷地にあったバークレイ大学に感動しました。私は、ドイツから来たユダヤ系移民も混じっていた学生たちと話をしました。彼らは私に、ドイツではナチスが自由を抑圧していて、まもなく戦争になるだろうからドイツに帰らずアメリカに止まるように、と強くすすめました。私は難しい立場にありました。というのは、一方では、国家社会主義者たちに共感することはなく、彼らの大国政策を非常に危険だとみなしていましたが、他方では、DAADの奨学金のおかげで学位請求論文を書き上げることができ、ドイツで学位を取りたかったからです。ちょっと考えて、ドイツに帰ることに決めました。

チフスのことでとても心配していた両親を訪ねたあと、私は学位請求論文を提出するためにミュンヘンに行きました。私の指導教授はそれを「優」と評価し、「君が日本の検察の任務と政治的立場について書いたものは非常に面白い。われわれは君が書いたものを信じるしかない。われわれにはそれを調べることができないから」と言いました。口頭試問はもっと大変でした。私が日本にいた間に、一連の新しい法律が公布されていて、それについて私はまったく分かっていなかったからです。それで、総合評価は「良」とされました。

ベルリンの独日協会ですばらく働いたあと、戦争が勃発し、私は徴兵検査を受けました。そのとき、日本語のできる人間を探していた外務省が私を採りました。私のおもな仕事は、ベルリン駐在の日本人特派員に外務省の広報担当官の話を日本語にして解説することでした。彼らは、広報担当官が言ったのと違うことや、まったく逆を書くことがよくあったからです。とりわけ、ドイツ語の二重否定が否定の強調であるのに、日本語では肯定を意味するということが原因でした。

1940年の秋、東京のドイツ大使館が緊急に日本語を話し読むことができる若い男を必要としているが、また日本に行く気があるか、という打診を受けました。私は承諾して12月半ばに再びシベリア横断鉄道で東京に向かいました。

1941年から1947年までの東京のドイツ大使館勤務時代については2つの事件・体験をお話したいと思います。ゾルゲ事件と終戦です。というのは、この興味深く緊張感のあった時期について詳しく話すと長くなりすぎるからです。大使館で私は広報班に配属されていたので、頻繁にドイツ人ジャーナリストたちと会い、後に大物スパイと分かったリヒャルト・ゾルゲとも会っていました。ゾルゲはつかみ所のない人物でした。彼の大酒と女に関する話は有名で、彼は

党员であったにもかかわらず、公然とナチスを批判することでも知られていました。彼がソビエトのスパイであり、ドイツ人技師の助けを借りてソビエトの東海岸に無線で報告を送っているなどは誰も少しも疑いませんでした。彼は長年フランクフルター・アルゲマイネ紙のフリーの通信員であり、日本の内政と中国大陸における拡張政策について非常によく通じていたことで知られていました。彼はドイツ大使館と良好な関係を保ち、日本のドイツ人社会のために小さな情報誌を作っていました。それには、ドイツ国防軍の報告や、大使館がテレタイプで得ていたドイツの新聞のニュース解説が載せられていました。彼はオット大使と親しくしており、大使は彼と好んでチェスをし、政治状況について論じていました。堅い人物だった大使はゾルゲに秘密情報をひとつも教えなかったと私は確信しています。しかし他方、彼はゾルゲから日本の政治プランや中国の状況についての注目すべき重要な情報を得ていました。

独ソ戦争の勃発後すぐに、私はゾルゲ一人を昼食に自宅に招きました。私たちは当然、この大事件と、ヒトラーがソ連に攻撃をしかけるきっかけとなった原因について語り合いました。私が「ヒトラーは、演説のなかでいつも第1次世界大戦の大きな失敗と言っていた2正面戦を始めるための重大な理由をもっていたに違いない。ヒトラーは、ソビエトがドイツを攻撃する意図をもっていることを示す明確な証拠を得て、この攻撃の機先を制するつもりだったのではないか」と言うと、ゾルゲは真顔になって立ち上がり、興奮して「スターリンはドイツを攻撃したりはしなかったろう。私はドイツを愛している。しかし、これでドイツは終わりだ。ナポレオンがロシアに敗れたように、ドイツはソ連に敗れるだろう。そして破滅するだろう」と言いました。当時私はこの言葉とゾルゲの興奮に特別な意味があるとは思いませんでしたが、後に彼がソビエトのスパイであることが発覚したとき、私は、ソビエトの外交官か将校ならああ言っただろう、と考えました。

ゾルゲはふたつの重要な情報により、第2次世界大戦の結末に影響を与えたとよく言われます。まず第一に、ドイツのソ連攻撃の時期を伝え、第二に、満州に駐留していた日本の軍隊はシベリアに進軍しないだろうと伝えた。それを受けて、スターリンはソビエトの部隊を西へ移し、ドイツの攻撃をモスクワの前で止めることができた、と言われます。

それについては、スターリンは英国の外交官のような、ゾルゲより信頼できる情報源からドイツの攻撃の時期を知ったけれども、それを信用しなかったかあるいは信用しなくなかったのだ、と言わなくてはなりません。日本軍がシベリアに進駐しないだろうという情報もモスクワはゾルゲから得ていたわけではありません。そう主張されるときにいつも忘れられているのは、1945年8月まで、東京には非常に活動的で情報に通じていたソビエト大使館があったということです。ソビエト大使館は、私たちと同様に、インドネシアの石油への通路を確保するため日本が南へ進撃しようとしていたのを知っていました。というのは、調達をアメリカに阻止されていた石油や燃料を確保しなければ、満州からシベリアへと向かう日本の攻撃は不可能だったからです。私の考えでは、ゾルゲの価値は一般に過大評価されています。彼は大した報酬も受けずに自分の生命を賭し、みごとに自分をカムフラージュし、完全に酔っ払っているときですら彼の共産主義的な考え方を少しも表に出さない、理想主義的な天才スパイでした。1941年に逮捕される直前、彼は日本を去る許可を求めたそうですが、ソビエト当局はこの願いをはねつけたと言われています。ゾルゲと彼の重要な日本人の情報提供者は、広範にわたる自白をしたあと死刑判決を受け、1943年11月にゾルゲは絞首刑に処されました。

1945年5月のドイツの無条件降伏は、私たちを日本人対して厳しい状況に置くことになりました。ドイツは三国同盟で他の同盟国の同意なしに休戦協定を

結べないという義務を負っていたからです。日本政府は、ドイツは三国同盟を破り日本を見殺しにした、と表明しました。日本は今や戦争と重荷のすべてを一身に背負わなければならない、と。しかし、私たちの日本人の友人のなかには、ドイツは力尽きてこれ以上戦うことができないということが理解できる、とそれとなく言ってくれるひともいました。

ドイツの降伏後、ドイツ大使館は活動を停止しなければなりませんでしたが。館員たちはますます激しくなる東京への米軍の空襲から逃れるために山の方へ移りました。親しくしていた日本人のある家族が、私ともうひとりの館員に、富士山から遠くない箱根湖畔の別荘を貸してくれました。そこで私たちは東アジアの戦争の終わりを体験しました。私たちは日本のラジオで、アメリカが1945年8月6日に広島市に新型爆弾を投下してひどい荒廃をもたらし、無数の犠牲者が出たというニュースを聴きました。ニュースは、爆弾を分析し適切な防衛措置を講じる必死の努力が行われている、と報じていました。後になってようやく、私たちは、それが、ほぼ町全体を破壊し、数万名の命を奪った爆弾だったということを知りました。数日後、日本のラジオは、2個目の同型爆弾が長崎に投下されたが被害は広島より少なかった、と報じました。

それから、私たちは日本のニュースで、天皇が8月15日にラジオ放送で日本国民に語りかける、と聞きました。これはきわめて異例のことで、日本人にとってはとんでもないことでした。神なる皇帝として敬われていた天皇は、それまで一度も日本国民に直接語りかけたことはなかったからです。私たちは、彼が終戦を宣言するのか、あるいは国民に徹底抗戦を呼びかけるのか考えました。多くの日本人が正座して泣きながら聴いた放送のなかで、天皇は「敵は、新しいきわめて恐ろしい爆弾を使い始めた。その威力は想像を絶し、多くの罪のない人命を奪う。それゆえ、すべての来るべき世代のために、耐え難きを耐

え、忍び難きを忍び大きな平和への障害を取り除く決心をした」と言いました。

長い歴史のなかで、日本はそれまで一度も外敵に破れたことがなく、そのため、1945年の無条件降伏は日本国民にとって重いショックでした。少なからぬ人々がこの不名誉を耐えて生きることができずに自殺しました。とりわけ、将校や役人たちでしたが、普通の国民のなかにも自殺した人々がいます。天皇の放送から数日して、私たちは家の上の方にあった森のなかで木に首をつった数名の日本人を発見しました。

日本が降伏したとき、アメリカの戦艦はまだ日本の海岸から数百キロのところにいて、まだアメリカの兵隊は日本に上陸していませんでした。ですから、私たちは、米軍上陸のときに何が起こるのかと緊張していました。狂信的な若い将校たちが指揮をとって本土戦が行われるだろう、と考えていたひともしれば、日本国民は身を隠し家を閉め切るだろう、と考えていたひともしました。実際にはいずれの事態も起きませんでした。日本国民は折り目正しく静かに振舞いました。わずかの人々が米兵を歓迎し、多くは人々は、最初にやって来たGIたちに不信の目を向けていましたが、彼らが慎みのある態度をとり、日本国民に不当な危害を加えなかったので驚いていました。

米軍の上陸後2週間ぐらいして、私たちは初めて米兵たちを目にしました。彼らは数人しか乗れない3輪トラックで私たちの山の集落にやって来て、多くのドイツ人に山中で会ったのでびっくりしていました。彼らは私たちを決して敵として扱わず、英語で話ができる白い顔にあったことを喜んでさえました。何人かは、彼らの祖先はドイツ出身だと話し、私たちが同じ地方の出身かどうかたずね、次の週末にまた来て、アメリカのビールをもってくる、と言いました。

私たちがまもなくアメリカの占領軍司令部から文書で受け取った正式の指示は、それほど友好的ではありませんでした。それは、私たちは住まいから一定の区域を離れてはならない、数週間後には本国へ送還される、と伝えるものでした。荷物は自分でもてるものだけ、とも書かれてありました。

私たちはそれで、なんとか持てるトランク2個と、背中に背負うためと胸に下げるためにふたつのリュックサックに荷物を詰めました。この荷物を持って歩いてみたら、多くのものをまた取り出さなくてはならないことが分かりました。

私たちが財産をかなり減らしたときに、占領軍司令部は、私たちの輸送に予定されていた「リバティー号」がもっと重要な任務に必要とされ、そのため私たちの出発は数週間延期されることになったと事務的に伝えてきました。数週間は数ヶ月になり、結局2年になりました。私たちの旅立ちが3回目に延期になったとき、私たちは、故郷がひどく破壊されているのだから帰国が延びるのはむしろ好都合だと考えて、自らを慰めました。もちろん自分たちの身内にできるだけ早く会いたいとは思いましたが……。

私たちは、私が英語とドイツ語の授業を引き受けた子供たちの学校を整備するのにとくに時間を使いました。日本の降伏から2年後の1947年8月に、私たちを乗せたアメリカの部隊輸送船「ジェネラル・ブラック」は横浜を出発し、途中上海に寄港して中国にいたドイツ国籍の人々を乗せ、私たちはプレーマーハーフェンに送還されました。

(聞き取りは1995年7月28日にフェルダフィングにおいて行われた)

4. ローレ・コルト夫人の体験

Lore Kordt : 1915年9月21日アントワープ生まれ。1941年1月から1943年7月まで東京のドイツ大使館勤務。1943年夏から上海のドイツ大使館勤務。1947年に上海から「ジェネラル・ブラック」に乗せられ本国送還。1947年に、戦争中同じく東京のドイツ大使館に勤務していたエーリヒ・コルトと結婚。その後、1965年に日本再訪。

1941年1月から1943年7月までの私の日本滞在は計画されたものではありませんでした。1939年の戦争勃発のとき、私はシンガポールのドイツ総領事館で働いていました。私は当時23歳でした。イギリスは、数週間の猶予期間の後、私たちをオランダ領インドのバタビア（現在のインドネシアのジャカルタ）へ行かせました。さらに数週間後（私はその間に、オランダ育ちでオランダ語がよくできたために、あるドイツの会社に良い職を得ていました）、ベルリンへ帰るようという外務省からの誘いがありました。しかし、私はバタビアに残る方を選びました。

1940年5月8日のヒトラーのオランダ攻撃のあと、オランダ領インドにいたすべてのドイツ人は収容所に入れられました。私は、バンジョエ・ピロエ（スマラン近郊：インドネシア、ジャワ島中部北岸の港湾都市）の女性収容所に入りました。ちなみに、そこは後に日本がオランダ人を収容したところです。ドイツ人の利益を代表してくれたスイス領事の助けで、私は7ヶ月後に小さな日本の汽船に乗り、修道女や婦人牧師補たちと一緒にスマトラ島を発って神戸に向かいました。

私たちの最初で唯一の停泊地は、フォルモサ（現在の台湾）の基隆（キールン）でした。二人の日本兵に伴われて、私たちは下船を許されました。雨が降っていて、見るべきものは多くありませんでした。同行の兵隊が午後「ウイスキーとドイツ音楽」があるバーに行こうと提案しました。私たちの小さな

グループのほとんどのひとにとって、おそらく初めてのバー体験でした。コーヒーカップに入れた日本のウイスキーが出され、ツァーラ・レアンダーの声が響いていました。彼女は「故郷よ、私はお前を愛す、私がかつて重い心でお前のもとを離れ……」と歌っていました。涙が流れました。そこは当時は日本でしたから、これが私の最初の訪日でした。

1月30日「(ヒトラーの) 権力掌握の日」に私たちは神戸に到着しました。晩にドイツクラブで、旗が掲げられ、演説と楽器演奏と歌のあるパーティーが開かれました。

冬らしい寒さでした。私は、暖かいウール製品の買い物をしているときに、ある店で熟したイチゴときれいな花を見たのを思い出します。

総領事と奥さんが、彼らと一緒に温泉のあるウインター・スポーツ客もたくさん来る滋賀の山のなかで過ごさないかと誘ってくれました。そこには深い雪のなかで湯気を立てているプールもありました。その後、ほかにもいろいろ遠出をして、京都や奈良も訪れ、私にとってまったく未知の世界に入るように努めました。

ベルリンからの一通の電報で、私はバンコクへ移ることになりました。しかし、その筋から伝えられたところによる当時はバンコク行きの船の便はなく、また私自身ふたび熱帯の気候のなかで暮らしたくなかったので、東京の大使館に行きました。東京では人手不足だったため、私は歓迎されました。私は新しい部署に配属されましたが、立ち上げのためにたくさん仕事があり、私も多くの仕事を与えられました。

私はすぐに日本語の授業を受けました。まず第一に、少なくとも滞在国の言葉の基本を学ぶことは、礼儀上の必要な行為だと感じていたからです。それに、当時の日本ではそれは絶対に必要でした。人々はたいへん国粹的で、外国のもののすべてに対して拒絶的でした。ドイツ人の主婦たちは買い物に自分の子ども

を連れて行きたがりました。子どもたちはたいてい両親より上手に日本語を話しましたし、日本人は一般に子ども好きだったからです。

私は幸い、女性の同僚と二人で、帰国休暇中のドイツ人が住んでいた小さな家具付の家を借りることができました。私たちは、初老の日本人の使用人夫妻を引き継がなければなりませんでした。喜んでそうしました。それで日本人との密度の濃い接触が生まれました。この夫妻は1923年の大地震も経験していて、その恐ろしさを話してくれました。頻繁に起きたごく小さな地震でも彼らは外へ飛び出していきました。使用人に関するそれ以前の経験と比較して、彼らの自覚の強さが印象的でした。私があるとき「もうまた鶏肉なの！」と言うと、驚いたことにこの奥さんが「ともかく鶏肉が手に入るんだから喜んでください」と私をたしなめたことを覚えています。彼女は正しかったのです。というのは、当時すでに買えるものはあまり多くなく、良い関係を通してのみ手に入れられたからです。

旅行は困難でした。どんな遠足にも「許可」が必要でした。写真撮影はほとんどどこでも禁止されていました。週末に海へ出かけたときに私は列車から降りそくなってしまいました。本を読んでいて、目を上げたときには周囲は空でした。列車は、当時は軍港で外国人が入れなかった横須賀まで行ってしまいました。私は椅子の下に隠れ、すでに監獄に入ってしまったような気がしました。しかし、列車は短時間停車しただけで引き返しました。私は気づかれずに下車することができました。その恐怖を私は長く忘れませんでした。

東京のドイツ人社会は比較的大きなものでした。たいていお互いに知っていて、引越してひとが入れ代わるということはほとんどありませんでした。でも、以前シンガポールやバタビアでもそうだったように、私の東京滞在は土地に馴

染むには短かすぎました。

1941年12月7日から8日にかけての夜に、私は出かけていた神戸から東京に帰る列車のなかにいました。朝方、列車が止まり、私は目を覚ましました。寒かったにもかかわらず多くの乗客が列車を降りました。数人が何かを探しているかのようにプラットフォームをあちこち走っていました。新聞だったのでしょうか。ほかの人々はいくつかの小さなグループになって集まり、立ち話をしていました。それまでに私が日本で経験したことがないような息苦しい興奮した気分が支配していました。喜びや感激のかけらもありませんでした。大使館に着いてはじめて私は日本の真珠湾攻撃について知りました。

1942年11月の末に、ドイツ大使は、スパイ容疑で逮捕されたりヒャルト・ゾルゲと親交があったために呼び戻されました。私のいた部局の長だった参事官は、その後南京へ転属になりました。このような変化があったあと、1943年の夏に、私は上海の同僚と職場を交換できてよかったと思いました。

終戦は日本が占領していた中国で体験しました。ほとんど姿を見せなかった日本兵は、彼らの営舎に引っ込んでいました。私は自分の目で、日本軍の歩哨が、通りかかった中国人に唾をかけられるのを見たことがあります。その日本兵は感情を顔に表さず、不動で真っ直ぐ前を見つめていました。屋根のないトラックで、罵声を浴びせる上海の群衆のなかを運ばれて行くときも、日本兵たち（ほとんどはまだ若い青年たちでした）は、こわばった顔をして立っていました。彼らの心の中には何が去来していたのでしょうか。

1945年5月のドイツの降伏と、8月はじめの日本の降伏、そしてその年末の米軍の到着との時期、私たちは国際法上一種の真空の空間のなかにありました。

私は1947年8月になってアメリカの部隊輸送船「ジェネラル・ブラック」で本国へ送還されました。この船は日本から送還されるドイツ人を乗せて、3週

間かけてブレーマーハーフェンまで航海しました。そこから私たちは夜に鉄道でルートヴィヒスブルクに運ばれました。夜が明けたとき、私たちはヴェルツブルクの辺りを走っていました。破壊された街の光景を（それが私が見た初めての景色でした）私は決して忘れません。

収容所から出されたあと、私は同行した人々と荷物を持ってルートヴィヒスブルクの路上に立っていました。私たちをミュンヘンに運んでくれることになっていたトラックを待っていたのです。元気そうな女性が私の方にやって来て、元気の出るようなシュヴァーベン訛りで「あなたたちどこから来たの」とたずねました。私は「中国と日本から来ました」とありのままに答えました。すると、その女性は憤慨して「親切に聞いてあげたのに」と言って立ち去ってしまいました。

(聞取りは1995年5月11日にボンにおいて行われた)